短 報

顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛¹

—自己愛の3下位尺度との関連から—

藤井 勉 誠信女子大学校人文学部・NPO法人教育テスト研究センター (CRET)

澤海崇文 東京大学大学院人文社会系研究科・NPO法人教育テスト研究センター (CRET)

相川 充 筑波大学大学院人間総合科学研究科・NPO法人教育テスト研究センター (CRET)

Discrepancy between explicit/implicit self-esteem and narcissism

Tsutomu Fujii (*College of Humanities, Sungshin Women's University /
Center for Research on Educational Testing (CRET)*)Takafumi Sawaumi (*Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo /
Center for Research on Educational Testing (CRET)*)Atsushi Aikawa (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba /
Center for Research on Educational Testing (CRET)*)

In the present study, the authors focused on discrepancy between explicit and implicit self-esteem. Previous literature showed its association with maladaptive aspects such as narcissism, and the present study predicted the same tendency. Seventy-seven college students completed the Implicit Association Test for measuring implicit self-esteem, and the self-report scales of explicit self-esteem and narcissism. A series of analyses of variance revealed a significant interaction effect between explicit and implicit self-esteem on self-assertion (subscale of narcissism scale). However, this interaction effect was directionally contrary to our hypothesis. For future directions, scholars have to closely examine this interaction and collect more data.

Key words: explicit self-esteem, implicit self-esteem, discrepancy, narcissism

問題と目的

自尊心 (self-esteem; 以下SEとする) の研究は、長年にわたり続けられてきた。従来、SEの測定は質問紙法などの顕在的な自己報告が中心だったが、近年は潜在連合テスト (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下IATとする) と呼ばれる潜在的測度を用いた研究も多く行われている。

IATは、画面上に連続して現れる単語の分類課題を通して、特定の概念を潜在的 (implicit) に測定する。一般的にIATで潜在的SE (以下ISEとする) を

測定する際は、カテゴリー次元 (自己-他者) と属性次元 (快い-不快な) に関連する刺激語 (自分、友だち、嬉しい、醜いなど) について、対応するキー押しによって、単語のグループ分けを行う。課題の中で、カテゴリー次元と属性次元が組み合わせられた試行を2種類 (そのうち1種類は組み合わせが逆) 行い、反応時間が早い組み合わせ課題の方が、対になっているカテゴリーと属性の連合が強いと考えられる。IATは個人差の測定に十分に敏感で、信頼性・妥当性にも優れるとされる (潮村, 2008)。

Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll (2003) は、顕在的SE (以下ESEとする) は“意識的な報告や回答から得られるSE”であり、潜在的SE (以下ISEとする) は“無自覚な回答から得られるSE”であると定義した。Jordan et al. (2003) は、高いESEをもつ者に2つのタイプを仮定し、確信的な自己のポジティブな見方をもつ“secure high SE (安定的高SE)”と、脅威に対し脆弱なポジティブさをもつ

Correspondence concerning this article should be sent to: Tsutomu Fujii, Sungshin Women's University, 249-1, Dongseon-dong 3-ga, Seongbuk-gu, Seoul 136-742, Korea (e-mail: tsut0muf@sungshin.ac.kr)

¹ 本研究は、第一著者および第二著者がNPO法人「教育テスト研究センター (CRET)」の連携研究員として、第三著者が理事として行ったものである。

“defensive high SE (防衛的高SE)” の存在を指摘した。個人内でESEとISEの高低に不一致がある場合、その不一致を解消しようとして防衛的反応が生じるといふ。実際にJordan et al. (2003) は自己愛や内集団ひいき、認知的不協和の解消を従属変数とし、ESE・ISEの不一致に関して検討した。その結果、ESEが高く、ISEが低い者は、自己愛や内集団ひいきが高く、認知的不協和の解消を図っていた。また、原島・小口 (2007) はIATを、藤井 (2014) はName Letter Task (Nuttin, 1985) をISEの指標とし、内集団ひいきを従属変数として同様の実験を行い、Jordan et al. (2003) の結果を追認している。

また、Schröder-Abè, Rudolph, Wiesner, & Schütz (2007) は、高ESE者に限定せず、ESEとISEの不一致 (i.e., 高ESEかつ低ISE, または低ESEかつ高ISE) を対象に研究を行った。ここでは、ESEとISEに不一致を示す参加者は、自身の印象に対するネガティブなフィードバックを読む時間が短く、自身の脅威となる情報を読むことを避ける防衛的反応を行っていた。

本研究で取り上げる自己愛とESE・ISEの関連は、Bosson, Lakey, Campbell, Zeigler-Hill, Jordan, & Kernis (2008) が述べている。自己愛人格者は、根底にある“劣っている”という感覚を、自身を誇大的に示して覆い隠すという特徴がある。すなわち、自己愛が高い者は、その根底にある劣等感を隠すため、高いESEを報告するという。マスク・モデルと呼ばれるこのモデルを支持する結果は、Jordan et al. (2003) で得られている。しかし、本邦でこの追試を行った川崎・小玉 (2010) では、従属変数である自己愛に対しESE・ISEの交互作用は検出されず、結果は再現されなかった。また、Bosson et al. (2008) も、ESE・ISEと自己愛との関連を扱った研究を収集してメタ分析を行っているが、マスク・モデルは支持されていない。

ただし、川崎・小玉 (2010) は、自身の研究で交互作用が検出されなかったことが、必ずしも即座にマスク・モデルそのものを否定するものではないとし、マスク・モデルに適合するタイプの自己愛人格者を適切に抽出する方法や、無意識的な自己無価値感をよりの確に反映する指標の開発など、更なる検討が課題であると述べている。加えて、原島・小口 (2007) が指摘するように、西洋と東洋では、ESEの得点の分布が大きく異なる。ゆえに、海外における先行研究がそのまま再現されるか否かは自明ではないことから、本邦における先行研究である川崎・小玉 (2010) と同様のパラダイムを用いた知見の追加は有益であると考えられる。また、Schröder-Abè et al. (2007) の知見を踏まえれば、高ESE群だけでなく、低ESE群も含めて、ESE・ISEの不一致について検討する必要がある。

そこで本研究では、以下の2点の修正を行い、Jordan et al. (2003) や川崎・小玉 (2010) の追試を

行う。

修正点の1点目は、IATで用いる刺激語の選定である。本邦で用いられるSE-IATに使用される刺激語は、英語版IATの刺激語 (I, my, me など) を直訳し“私は”、“私の”、“私を”などが使用されることが多い。こういった刺激語を用いた場合、参加者が“私”という語が含まれているか否かに注目し、課題を単純化する可能性が指摘されている (e.g., Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007)。この点に配慮し、本研究では“わたくし”、“自分”などの刺激語を用いた藤井・上淵 (2010) のSE-IATの刺激語を使用する。

2点目は、自己愛の種々の側面とESE・ISEの関連を詳細に検討するため、下位尺度ごとに分析を行う点である。Jordan et al. (2003) や川崎・小玉 (2010) は、自己愛を測定する自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) を1因子と仮定して分析したが、本邦では因子分析の結果に基づき、自己愛は3下位尺度 (“優越感・有能感”、“注目・賞賛欲求”、“自己主張性”) が仮定されることが多い。3下位尺度間の相関はいずれも正であることは小塩 (1998) などが示しているが、同一概念ではなく、他の尺度との関連も異なる。たとえば、小塩 (1998) はNPI-Sと友人関係との関連を検討しているが、“優越感・有能感”は気遣いや集団同調といった、周囲との調和をめざす付き合い方とは有意な相関がない一方で、“注目・賞賛欲求”はこれらと有意な正の相関があった。また、“自己主張性”は、気遣いとは有意な負の相関がみられていた。加えて、ESEは優越感・有能感と.29、注目・賞賛欲求と-.09 (*ns.*)、自己主張性と.52の相関係数が示されている。このように、自己愛の下位尺度は他の変数との関連が異なることから、詳細に検討する意義があると思われる。ゆえに、本研究でも小塩 (1998) による3下位尺度を用いて分析・検討を行う。また、高ESE群に限定せず、低ESE群に対しても、交互作用が見られるか検討する。

方 法

参加者

東京都内の大学に通う大学生77名 (男性42名、女性35名。平均年齢19.92歳, *SD* = 1.25) を対象とした。

材料

本研究では、以下の尺度を用いた。

(a) **自尊心尺度** ESEの指標としてBrislin (1980) のcommittee approachに基づきYamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, Shiomura, Kobayashi, Cai, & Krendl (2007) が用いた10項目からなる尺度を用いた (項目例: “私は自分を少なくとも人並みに価値のある人間だと感じている”, “私は自分自身に対して

Table 1
SE-IATの手続き

ブロック	内容	詳細	試行数
1	カテゴリー	自己-他者	20
2	属性	快い-不快な	20
3	組み合わせ1	自己+快い-他者+不快な	20
4	組み合わせ1	自己+快い-他者+不快な	40
5	カテゴリー	他者-自己	20
6	組み合わせ2	他者+快い-自己+不快な	20
7	組み合わせ2	他者+快い-自己+不快な	40

注：組み合わせ課題の実施順序を相殺するため、半数の参加者はブロック1, 3, 4と5, 6, 7の実施順序を逆に実施した。

Table 2
SE-IATの刺激語

自己	他者	快い	不快な
自分	友人	うれしい	汚い
自身	知人	幸せな	残忍な
私	他人	気持ちいい	気持ち悪い
我々	知り合い	元気	苦痛
わたくし	ともだち	素晴らしい	落ち込む

注：上段がカテゴリー語および属性語、下段が刺激語である。

好意的である”)。以下SE尺度とする。

(b) **SE-IAT** 参加者のISEを測定するために使用した。カテゴリー語は“自己-他者”とし、属性語は“快い-不快な”を使用した。刺激語は課題の単純化を防ぐため、“私の”、“私は”のように特定の語が重複しないよう藤井・上淵 (2010) と同様、“自身、知人、幸せな、残忍な”などを用いた。SE-IATの実施の手続きと、用いた刺激語などをTable 1, 2に示す。このIATの再検査信頼性は、Fujii, Sawaumi, & Aikawa (2013) で確認されている²。

² 藤井・上淵 (2010) が使用したSE-IATはFujii et al. (2013) でも用いられているが、いずれの研究でも刺激語の妥当性に関するデータは報告されていない。そのため、本研究では刺激語の妥当性を確認するために予備調査を行った。具体的には、34名の男女 (男性12名、女性22名、年齢の $M=27.24$, $SD=7.68$) に対し、Table 2に記載されている刺激語について、SD法を用いて評定を求めた。“自己-他者”で使用了10語をそれぞれ“自己”および“他者”のどちらに近いが、“快い-不快な”で使用了10語をそれぞれ“快い”および“不快な”のどちらに近いかを4件法 (1: 自己 (快い) に近い-4: 他者 (不快な) に近い) で評定してもらった。このような刺激語の妥当性の確認方法はRichetin, Richardson, & Mason (2010) やFujii & Nakano (2012)、藤井・上淵 (2011) でも用いられている。予備調査で得られた各項目の平均値について、理論的中央値 (2.5) との差を求めたところ、すべて有意であり ($t_s > 8.80$, $p_s < .001$)、いずれの刺激語も予想された方向に評定されていた。ゆえに、このSE-IATで用いた刺激語は一定の妥当性を有すると考えられる。

SE-IATは7ブロックから構成され、手続きはTable 1のように進行する。ブロック1 (カテゴリー弁別課題, 20試行) は、呈示された刺激語が“自己-他者”のターゲット概念のどちらに属するか、それぞれ対応する二つのキー押し (左は“F”キー、右は“J”キー) で分類させた。

ブロック2 (属性弁別課題, 20試行) では、呈示された刺激語が“快い-不快な”の属性概念のどちらに属するかを分類させた。

参加者には、分類に際し“辞書的な意味で”判断するよう教示した。具体的には、“家族-家族以外”というカテゴリーで分類する例を挙げ、このときに“犬”という刺激語が出てきた場合、犬を家族のように感じていても、辞書的な意味の“家族”とは異なるため、“家族以外”に分類するよう教示した。

ブロック3 (組み合わせ課題1, 20試行) およびブロック4 (組み合わせ課題2, 40試行) は、ブロック1と2を組み合わせた課題に回答させた。画面左側に“自己”と“快い”が示され、画面右側に“他者”と“不快な”が呈示され、ブロック1と2で呈示された刺激語を分類させた。

ブロック5 (逆カテゴリー弁別課題, 20試行) では、ブロック1の“自己-他者”の位置を逆にした課題に回答させた。

ブロック6 (逆組み合わせ課題1, 20試行) およびブロック7 (逆組み合わせ課題2, 40試行) は、ブロック3, 4とは組み合わせが逆になった課題に回答させた。具体的には、画面左側に“他者”と“快い”が示され、画面右側に“自己”と“不快な”が提示される課題を実施した。また、組み合わせ課題と逆組み合わせ課題の実施順序は、参加者ごとにカウンターバランスをとった。SE-IATの刺激語をTable 2に示す。

(c) **自己愛人格目録** 自己愛傾向の指標として、小塩 (1998) の尺度を用いた。30項目からなる尺度であり、“優越感・有能感 (項目例: “私は、才能に恵まれた人間であると思う”、“私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う”)”、“注目・賞賛欲求 (項目例: “私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある”、“私は、みんなからほめられたいと思っている”)”、“自己主張性 (項目例: “私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う”、“私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う”)”の3下位尺度で構成される。下位尺度は各10項目である。

(a) と (c) は5件法 (1: あてはまらない-5: あてはまる) で回答を求めた。本研究の実施時には他の特性も測定したが、本稿では報告しない。

手続き

PCが一名につき一台設置されている教室を使用し、集団で一斉に実施した。参加者には、実験への参

Table 3
各尺度の記述統計量と相関係数および偏相関係数

	1	2	3	4	5	6	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
1 SE-IAT	—	.05	.18	.14	.00	.14	0.60	0.47	—
2 SE尺度	-.10	—	.72**	.38**	.43**	.63**	3.20	0.75	.87
3 優越感・有能感	.15	.62**	—	.61**	.46**	.86**	2.77	0.70	.87
4 賞賛・承認欲求	.04	-.12	.54**	—	.35**	.84**	3.18	0.80	.88
5 自己主張性	-.10	.18	.34**	.09	—	.72**	2.99	0.64	.80
6 自己愛全体	—	—	—	—	—	—	2.98	0.58	.91

** $p < .01$

注：右上は単相関係数を、左下は偏相関係数をそれぞれ記載した。偏相関係数の算出にあたっては、自己愛の他の下位尺度を統制した。

加は任意であり、実験に参加しないことによる不利益はないこと、申し出ればいつでも実験を終了できることを事前に伝えた。この説明を受けて参加の意志を変更した参加者はいなかった。参加者の同意を得た後に、SE-IATと顕在的測度を実施した。最後にデブリーフィングを行い、実験を終了した。実験に要した時間は20分程度であった。

結 果

尺度の得点化

各尺度について、顕在的測度は逆転項目を処理した上で合算平均得点を求めた。各尺度の α 係数はいずれも.80以上であり、内的一貫性は十分であると判断した。SE-IATはGreenwald, Nosek, & Banaji (2003)のD得点を求めた。各尺度の記述統計量および相関係数はTable 3に示すとおりである。自己愛の下位尺度間の相関が比較的高かったため、偏相関係数を併せて算出し、Table 3に記載した。

SE-IATとSE尺度の得点の様相

SE-IATとSE尺度の平均値について、それぞれ理論的中央値（順に0, 3）からの差を検定した。その結果、SE-IAT得点の平均値（0.60）は理論的中央値から有意に離れていた（ $t(76) = 11.24, p < .01$ ）。また、効果量は $r = .79$ であり、比較的大きな効果量が得られた。SE尺度の平均値（3.20）に対しても同様の検定を行ったところ、理論的中央値からの差は有意であった（ $t(76) = 2.29, p < .05$ ）。ただし、効果量は $r = .25$ と比較的小さい値であった。原島・小口（2007）でも理論的中央値からの差の検定がなされており、そこで報告されている t 値および自由度を用いて計算すると、SE-IAT得点の効果量 $r = .85$ 、SE尺度の効果量 $r = .16$ であった。ゆえに、原島・小口（2007）と近似した結果が得られたといえる。

相関分析

各尺度間の相関係数を算出したところ、SE-IATとSE尺度の相関係数は有意ではなく、SE-IATとその他の尺度との相関係数も有意ではなかった。SE尺度は、自己愛の全体得点および3下位尺度得点と全て正の相関が有意であった（ $r_s > .38, p_s < .01$ ）。

分散分析

ESEとISEについて、原島・小口（2007）と同様に、それぞれ中央値（順に3.20, 0.64）を基準に高・低群に分割した。続いて、自己愛の30項目全体の得点および各下位尺度得点を従属変数、ESE・ISEの高低を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果、“自己愛全体”に対してESEの主効果が有意であり（ $F(1, 73) = 24.67, p < .01, \eta_p^2 = .25$ ）、ESEが高いほど、自己愛全体の得点が高かった。ISEの主効果および交互作用は有意ではなかった。“優越感・有能感”に対してもESEの主効果が有意であり（ $F(1, 73) = 28.60, p < .01, \eta_p^2 = .28$ ）、ESEが高いほど、優越感・有能感の得点が高かった。ISEの主効果および交互作用は有意ではなかった。また、“注目・賞賛欲求”においてもESEの主効果のみ有意であり（ $F(1, 73) = 10.58, p < .01, \eta_p^2 = .13$ ）、ESEが高いほど、注目・賞賛欲求の得点が高かった。

さらに、“自己主張性”も、ESEの主効果が有意であり（ $F(1, 73) = 9.18, p < .01, \eta_p^2 = .11$ ）、ESEが高いほど自己主張性が高かった。加えて、ESE・ISEの交互作用が有意であった（ $F(1, 73) = 6.28, p < .05, \eta_p^2 = .08$ ）。単純主効果の検定を行った結果、高ESE群の自己主張性は、低ISE群（ $M = 3.01$ ）よりも高ISE群（ $M = 3.41$ ）の方が高く、高ISE群における自己主張性は、高ESE群（ $M = 3.41$ ）よりも低ESE群（ $M = 2.67$ ）の方が低かった（Figure 1）。

Figure 1. 自己主張性におけるESE・ISEの交互作用

考 察

本研究は、川崎・小玉（2010）において使用されたSE-IATの刺激語の問題と、自己愛の下位尺度ごとの検討が行われていない点に対応した上で、どのような結果が得られるかを検討するために行われた。まずは予備的な分析の結果を考察し、続いて主題の考察を述べる。

最初に、本研究で使用したSE-IATの平均値は、理論的中央値からの差が有意であったことから、全体的な傾向として、自己を潜在的にポジティブに評価する傾向が認められた。SE尺度の平均値についても理論的中央値からの差は有意であったが、効果量は比較的小さかった。この傾向は、SE尺度の平均値が理論的中央値と比して有意に離れているという点では異なっているが、効果量をもとに考えると、先行研究（原島・小口，2007）の結果と概ね整合すると考えられる。

また、SE尺度とNPI-Sの各下位尺度間の相関について、小塩（2008）によれば、自己愛とSE尺度との相関係数は.20から.50程度であり、.50を超えることは多くないと述べている。この点を考慮すると、本研究で得られた相関係数はやや高い。NPI-Sの3下位尺度とSE尺度との関係について、他の2下位尺度を統制した上で偏相関係数を求めると、SE尺度と有意な相関を示したのは優越感・有能感のみであった。したがって、優越感・有能感が、他の2下位尺度とSE尺度との相関関係に影響を及ぼしている可能性が示唆される。

続いて、ESE・ISEとNPI-Sの下位尺度との関連を検討するために分散分析を行った結果、NPI-Sの全ての下位尺度に対し、ESEの主効果が有意であった。すなわち、ESEが高い群ほど、優越感・有能感、賞賛・承認欲求、そして自己主張性が高いといえる。川崎・小玉（2010）は、下位尺度ごとの検討は行ってい

ないが、NPI-S全体の得点に対しESEの主効果が有意であったことを報告しており、本研究の結果と整合する。

そして、自己愛の下位尺度である自己主張性のみESE・ISEの交互作用が有意であったが、ESE高群において、ISE高群の自己主張性が有意に高く（または、ISE高群において、ESE高群の自己主張性が有意に高く）、Jordan et al.（2003）から予想された交互作用とは逆の結果であった。ゆえに、川崎・小玉（2010）と同様、本邦でマスク・モデルを支持しない結果が追加されたが、本研究で検出された交互作用の意味は吟味する必要がある。

自己愛における自己主張性はどのように位置づけられるのだろうか。小塩（1998）は、自己主張性は注目・賞賛欲求と比べると“控えめでない”という点において共通するものの、“自ら進んで行動を起こす”といった、能動的かつ積極的な項目群”から構成されると述べている。岡田（2007）も、自己主張性は自己愛のうちでも能動的で積極的な面を表し、注目・賞賛欲求は他者の評価を過剰に気にするような傾向と関わるとしている。これらの点を考慮に入れるならば、自己主張性は自己愛の他の尺度と比して、相対的にはポジティブな指標とみなせるかもしれない。

ただし、自己主張性にはネガティブな側面もある。小塩（2002）は、自己主張性は言語的攻撃との中程度の相関（ $r(511) = .57, p < .001$ ）や、身体的暴力との弱い相関（ $r = .12, p < .01$ ）があり、他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如の傾向とされる個人志向性N（伊藤，1995）と中程度の正の相関（ $r = .51, p < .001$ ）があったことを報告している。ゆえに、自己主張性は他の2下位尺度と比して誇大な自己愛とも考えられることから、過度に高い、もしくは低いことは望ましいとは言えない特性であろう。本研究においてESE・ISEがともに高い群（ $N = 17$ ）においては、自己主張性の平均値（ $M = 3.42$ ）は理論的中央値より有意に高かった（ $t(16) = 3.18, p < .01, r = .62$ ）。したがって、自己主張性に影響を与えるESE・ISEの両者が高いことも、望ましいと言えるか否かは注意すべきと考えられる。ESE・ISEの不一致のみならず、過度に高いESE・ISEがどのような結果をもたらすのか、という観点からの研究も一考に値すると思われる。

また、先行研究（Jordan et al., 2003; 川崎・小玉，2010）では、自己愛は1因子構造の尺度として扱われていたが、本研究では3つの下位尺度に分けて分析を行った。その結果、自己主張性のみ有意な交互作用が得られ、30項目全ての得点で構成した尺度では観察できない傾向がみられた。このことは、自己愛を1下位尺度ではなく複数の下位尺度から構成される概念と捉えることが妥当であることを示唆する。

加えて、本研究はSchröder-Abè et al.（2007）の知

見も踏まえ、低ESE群においても、ISEとの不一致の影響がみられるか否かを検討した。その結果、低ESE群において、ISEの高低による差はみられず、低ESE群における不一致については明確な結果は得られなかった。原島・小口（2007）も述べるように、低ESE群における不一致については、あまり検討がなされていない。このパターンの不一致は特に問題にならないのか、または異なる種類の防衛的反応を導くのか否かは、本研究の結果では明らかにできなかった。他の従属変数を用いた検討も必要であると考えられる。

Briñol, Petty, & Wheeler (2006) も、ISEとESEの不一致に着目した研究を行っている。ここでは、ISEとESEの不一致は認知的な不協和をもたらし、ネガティブな感情が生起することを示唆している。実際に、藤井（2014）は、高ESEかつ低ISEの群は、高ESEかつ高ISEの群と比して、ネガティブな感情である抑うつ・不安が高いという結果を得ている。これらの知見に基づけば、本研究の結果の別解釈として、ISEとESEの不一致によってネガティブな感情が生起することで自信のなさにつながり、結果として高ESEかつ低ISE群の自己主張性が低められたといえるかもしれない。本研究においても、有意ではないが、低ESE群の中で、高ISE群の自己主張性は低ISE群よりも低かったことから、この解釈も排除しきれない。

これらの点を踏まえ、本研究で得られた交互作用の更なる検討、およびデータの蓄積も含めて吟味していく必要がある。

引用文献

- Bosson, J. K., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Zeigler-Hill, V., Jordan, C. H., & Kernis, M. H. (2008). Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical and empirical review. *Social and Personality Psychology Compass*, **2**, 1415-1439.
- Briñol, P., Petty, R. E., & Wheeler, S. (2006). Discrepancies between explicit and implicit self-concepts: Consequences for information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 154-170.
- Brislin, R. W. (1980). Translation and content analysis of oral and written materials. In H. C. Triandis, & J. W. Berry (Eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology: Vol. 2. Methodology*. Boston: Allyn and Bacon, pp. 389-444.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, **85**, 93-99.
- Fujii, T., & Nakano, Y. (2012). Development of achievement goal orientations IAT and self-efficacy IAT. *Poster presented at the 10th Tsukuba International Conference on Memory, Tokyo, Japan*, 26.
- Fujii, T., Sawami, T., & Aikawa, A. (2013). Test-Retest Reliability and Criterion-Related Validity of the Implicit Association Test for Measuring Shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, **E96-A**, 1768-1774.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 紙筆版IATを用いた自尊心査定を試み 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, **61**, 113-120.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2011). 他者軽視傾向を測定するIATの作成 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, **62**, 287-291.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- 原島雅之・小口孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, **47**, 69-77.
- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, **13**, 39-47.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- 川崎直樹・小玉正博 (2010). 潜在的自尊心と自己愛傾向との関連—Implicit Association Test及びName Letter Taskを用いたマスク・モデルの検討— パーソナリティ研究, **19**, 59-61.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and using the Implicit Association Test: IV: What we know (so far) about the method. In B. Wittenbrink, & N. Schwarz (Eds.), *Implicit Measures of Attitudes*. New York, Guilford Press, pp. 59-102.
- Nuttin, J. M., Jr. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, **15**, 353-361.
- 岡田 努 (2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像— 世界思想社
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応、友人によるイメージ評価からみた特徴— 教育心理学研究, **50**, 261-270.
- 小塩真司 (2008). 自己愛からみた自己と他者 岡田 努・榎本博明 (編) 自己心理学5 パーソナリティ心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 132-144.

- Richetin, J., Richardson, D. S., & Mason, G. D. (2010). Predictive validity of IAT aggressiveness in the context of provocation. *Social Psychology*, **41**, 27-34.
- Schröder-Abé, M., Rudolph, A., Wiesner, A., & Schütz, A. (2007). Self-esteem discrepancies and defensive reactions to social feedback. *International Journal of Psychology*, **42**, 174-183.
- 潮村公弘 (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性 下斗米 淳 (編) 自己心理学6 社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 48-62.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, **18**, 498-500.

(2013年8月27日受稿, 2014年2月19日受理)